



夫婦で「彩」の事業に参画する田村トモエさん(73歳)。3年前、脳梗塞で半身不随になるも、「早く仕事に復帰したい」とリハビリに励み、車椅子から立ち上げられるようになった。今は右手だけで検品やパック詰めをこさす。「私には毎日やることがある。人生の中で今が一番しあわせ」と微笑む

# 地域資源を活用し、社会に貢献する

## 企業・行政・町民の協働事業

report

地域ビジネスでまちづくり——株式会社いろどり——

### 事業を通して生涯現役社会を形成

農家の庭先や段々畑に四季折々の花木が育ち、美しい景観を成す徳島県上勝町<sup>かみかた</sup>。もみじや南天、梅に桜など、これらの花木から摘む葉や花は日本料理に添える「つまもの」となり、町の産業を支える大切な地域資源である。

「彩」と名付けられた「つまもの」の生産事業は1986年にスタート。当時、上勝町農業協同組合の職員だった横石知二氏(現「株いろどり」代表取締役社長)が、異常寒波で打撃を受けたみかん栽培の代替策のひとつとして、一年中商材を確保できる「つまもの」の商品化に乗り出したのがきっかけ。軽くてきれいな商材は高齢者や女性も扱いやすく、「彩」の仕事を通して「町民一人ひとりに役割をつくり、地域から必要とされている」と感じる社会を築くことという横石社長の思いが事業テーマとなっている。人口約2千人、高齢化率約5割の同町で、「彩」の事業に参画する約200名の生産農家の平均年齢は約70歳。今や全国一の出荷量を誇る、この事業の原動力は、地域の高齢者たちである。

「彩」の運営を担うのが「株いろどり」で、高齢者が使いやすいパソコンでの受注システムを96年に導入。全国の市場から毎朝入る注文を農協が取りまとめ、各農家へ



のどかな田舎町から一大産業地域へと生まれ変わった上勝町。「彩」の事業の成長は高齢者に生きがいを与え、その他の地場産業の拡大や若い人材を引き寄せるなど、様々な相乗効果を生んでいる





夫の田村利一さん(81歳)は、葉っぱの摘み取りを担当。加盟農家の中でいち早くハウス栽培を始め、つまもの用の青もみじや食用のよもぎを一年中出荷している



大きな文字で操作しやすい「彩」専用のシステムで、農協から配信される注文や本日の市況をチェック。「売上げのランキングを見るのが楽しみ」という



### 「株式会社いろどり」問い合わせ先

〒771-4501  
徳島県勝浦郡上勝町大字福原字平間71-5  
TEL:0885-46-0166  
<http://www.irodori.co.jp/>

“後継者育成”に取り組む上勝町では、農家がインターネットの受け入れ先として協力。仕事の実体験や町民とのふれあいを通じ、地域ビジネスを学ぶ。研修生が「株いろどり」に就職した例も

一斉に発注する。農家ごとに栽培状況が異なるため、受注する商品と数量は各自で判断する。受注は早い者勝ちで、パソコンのすばやい操作も求められる。また、売れ筋の傾向など農協がつかんだ市況の動きを、「株いろどり」から各農家へ毎日配信。生産者はその情報をチェックして翌日の出荷商品を予想するなど、パソコンを活用しながら一事業主の意識を持つて取り組んでいる。

作業は、葉や花の摘み取り、検品、パック詰め、農協への運搬までを農家が行い、その後の出荷業務は農協の職員が担当。農協と農家、そして「株いろどり」の協働により仕事が流れている。さらに、農家ごとの売上金額をパソコン上でランキング表示するシステムも功を奏し、高齢者のやる気を喚起。「ビジネスとしての手ごたえがあるから楽しくて生きがいを感じる。実際、上勝町のお年寄りはとても元気で、医療費や生活保護費が少ないというデータも。地域福祉にもつながる彩の仕事で、生涯現役社会を実践しています」。そう語る横石社長は現在、後継者育成にも力を注ぐ。

2010年より始まった内閣府の事業「地域密着型インターネット研修」では「株いろどり」が運営を手がけ、上勝町においては2年間で約200名を受け入れる予定だ。11年度は町でも雇用対策の枠組みに予算を大幅に計上するなど、地域をあげて人材育成の支援を行っている。その中心的役割となる「彩」の事業は、新しい農業モデルとして若い世代にも魅力的に映り、「上勝町で働きたい」と志願するiターン者が後を絶たないという。高齢者の暮らしに活力を与え、同時に後継者を受け入れる場を創出し、持続可能な地域づくりに貢献する「株いろどり」を中心に広がる上勝町の取り組みに、これからも注目したい。

(文責・CEL編集室)

CEL



町民の能力とやる気を引き出し、地域ビジネスを展開する横石知二氏。上勝町農業協同組合、役場の職員を経て、現在は「株いろどり」の代表取締役社長を務める。著書「そうだ、葉っぱを売ろう!」(ソフトバンククリエイティブ株)の映画化も決定



「株いろどり」の社内風景。町が70%出資する第3セクター会社で、運営費は農家の拠出金による。社員8名は20～30代のiターン者。業務は「彩」の運営をはじめ、町が扱う農産物全般の拡販や、年間約4000人訪れる視察への対応も行っている